



第401号
「がんばろう、日本!」
国民協議会
機関紙

発行所「がんばろう、日本!」
国民協議会
発行人 戸田政康
編集人 石津美知子
http://www.ganbarou-nippon.ne.jp
(東京事務所)
東京都千代田区九段北4-3-16
サンライン第14ビル6階 〒102-0073
TEL 03(5215)1330
FAX 03(5215)1333
(発行所)
東京都東大和市南街2-17-16
パピルス会館 〒207-0014
TEL 042(566)2950(代)
FAX 042(566)2949

「自分たちで決めたい」のか 「誰かに決めてほしい」のか

受益者市民にとって、政治は憂き晴らし。

「何が大切かを落ち着いて考える」リアルで ポジティブな主権者の場づくりを。

リーダー勝負からフォロワー勝負へ

冷戦終焉に際して「氷が割れるときが一番危ない」と言ったのは、確かサッチャー女史であった。これまでのシステムや枠組みが歴史的に持たなくなり、その命脈は尽きつつあるが、それに代わる新しいシステムや枠組みは未だ成らず、という移行・転換の時期こそ、もっとも不確実で不安定な状態だ。国民国家万能の時代には地政学上の「力の空白」、あるいは内政上の権力の空白といったことが不確実性、不安定性の根源であった。ここでのガバナンスは、主にリーダー勝負だった。

しかし国民国家が相対化され、GOといわれるようになった時代、そしてグローバル化によって国境を超えたフラット社会が出現しつつある今日では、むしろフォロワーシップの勝負となる。わが国周辺での領土をめぐる一連の事態、あるいは政権交代後の「迷走」―内外ともに「何が大切かを落ち着いて考える」ことができるフォロワーシップこそが、ますます問われている。

韓国、中国の強硬姿勢の背景構造は、いくつかの層をなしている。大きく言えば、ひとつはアメリカの相対的な地位の低下と中国の台頭に象徴される、国際的な力と富のバランスの変化と、それに伴う流動化。もうひとつは大統領選挙や共産党指導部の交代という、政治権力の移行期におけるバランスの変化と流動化。とくに中国の場合、「世界の工場」といわれてきた経済モデルからの転換が否応なく迫られるなか、これまで「経済成長」によって覆われていたさまざまな問題が顕在化、先鋭化しつつあるというきわめて難しい局面にある。このなかで、指導部交代をめぐる権力闘争も絡む複雑な構造になっている。

いつ炎上してもおかしくない、この微妙きわまりない時期に、「尖閣諸島国有化」などという燃料投下はしないでくれ―APEICで胡錦濤主席が野田総理に伝えた「日本政府は事態の重大さを認識」とは、簡単に言えばこういうことだったのだらう。しかしその翌日、尖閣諸島国有化は閣議決定された。これを受けて中国も、領土問題で勝負に出た。反日暴動のきっかけは、おそらくこういうことではなかろうか。(唐家璇・前国務委員は日中友好団体代表との会談の際「会談直後の国有化でメンツをつぶされた」と述べた。毎日9/28)

立委判つ鳴とが風日し念民うは
あど九心あ徒置鳥被反鳥
いはう民念し日風とが鳴つ判委立て
ばよかつたのか。そうではない
だらう。領土問題を「棚上げ」
して関係を深める、という四十
年前からの枠組みそのものが、
すでに時代の変化に適應できな
くなっている。良くも悪くもリ
ーダーが仕切ることができると
ら、「棚上げ」もできらなかつた。
しかし今や中国でさえ、政府の
意向で世論をコントロールする
には限界がある。日本において
はとくに、リーダーの不在を
嘆き、政治の劣化を評論するよ
りも、フォロワーシップの転
換・成長こそが具体的課題にな
っている。

場の上陸だった。この活動家は五
象星紅旗を燃やすなど反中共でも
よく知られたプロ活動家で、香
港の立法機関である立法評議会
選挙にも立候補するとも言われ

東京都東大和市南街2-17-16
パピルス会館 〒207-0014
TEL 042(566)2950(代)
FAX 042(566)2949
〈郵便振替〉00160-9-77459
「かんぱろう、日本!」国民協議会
ゆうちょ銀行 019店 当座0077459

1部 300円
定期購読 半年2,000円
一年3,500円

今号の紙面

2-3面	インタビュ―
3-5面	福嶋浩彦・前消費者庁長官
5-7面	囲む会／根本崇・野田市長
8-10面	インタビュ―
10面	武久顕也・瀬戸内市長
10面	インタビュ―
10面	寺谷誠一郎・智頭町長
10面	西栗倉村「百年の森」訪問記
10面	囲む会
11-14面	五十嵐文彦・財務副大臣

ていた。しかし九月に行われた立法評議会選挙の最大の争点は、香港市民から「洗脳教育」と批判された中国による国民教育だった。国民教育導入政策に異を唱えるティーンエイジャーたちが、世論の拡がりを後押ししたという（ふるまいよしこ「中国風見鶏便り」ニューズウィーク日本版9/11）。

尖閣に上陸した活動家を歓迎した市民と、連日、香港政府庁舎を囲む抗議集会に参加した市民（時には十万人を越えた。こうしたフォロワーシップの構造は、反日・親日では見えてこない。

同じことは中国の反日暴動にもいえるだろう。デモがあればどこまで暴徒化した背景には、九〇年代生まれの若者たちを中心に、言うに言われぬ閉塞感があるといわれている。同時に暴徒化を批判し、それとは距離を置く世論も確実に存在する。

例えば多くのニュースで「青島のジャスコやパナソニックが被害を受けた」と報じられたが、反日デモが暴徒と化したのは青島市の中の黄島エリアのみ。ここは外資が優遇される保税地区だ。黄島のジャスコは爆撃で破壊されたかのような様相を呈しているのに対して、対岸にある青島のジャスコは平常営業で、駐車場もほぼ埋まっているという。なぜ黄島でこれほどの暴動が起き、青島では起きなかったのか。象徴的なのは、青島の中心市街と黄島を結ぶ真新しい巨大な橋の通行料。五〇元の通行料は、黄島で働く若者の最低賃金（日

給に換算）よりも高い計算になるという。（記者が訪ね歩いた反日暴動、憎悪と恐れの傷跡「日経ビジネスオンライン9/27」）

だからこそわれわれは、次のような中国のフォロワーの声に真摯に向き合う必要があるだろう。「中国国民はデモという手段ではあつたけれど、自分の心にある怒りや不満、どうにも押えられない気持ちをおそこで表現したんです。そうした下層の若者たちの苦悩の気持ちの一端は、ぜひ日本人にわかしてほしい」

「中国国内には、日本人には想像もできないほどさまざまな問題が山積しています。中国は一見、膨張して大国化したかのように見えますが、建国からの歴史も浅く、未熟な点も多い。中国政府も人民も苦しみもがいている最中なのです。どうか、そのことをわかってください」（「えっ」日本は中国と戦争したがっていいって？ 中島恵 日経ビジネスオンライン9/20）

中国の人々が感じる閉塞感や格差、社会矛盾は日本の比ではないだろう。そのなかで、自暴自棄になったり破壊行為に走りたりせずに、問題と向き合う忍耐をどう育んでいくのか。そうしたフォロワーシップの醸成をめぐる、市民社会の対話こそが求められているのではないか。人々の感情に訴え、お互いを非難して強硬姿勢を唱えるのはたやすい。しかしその見返りは、お互いの利益や社会のつながりの破壊以外のなものでもなく。

幸い今のところ、日本では強硬姿勢を煽るような世論は少数

だ。むしろ政治のほうが過大評価しているくらいがある。「後戻りできない次元にまで経済的連携の深まった東北アジアにおいて、（近隣国）に対する憎悪を利用して、こうした姿勢は例外なく経済合理性に反する。一時的熱狂に踊る国民は一定数いるかもしれないが、それ以外の国民は、日常生活者として、これらの点を認識せざるをえない」（高原景彰 毎日「月刊ネット時評」9/24号）。

暴徒が店舗や工場を破壊すれば、失われるのはそこで働く中国人従業員雇用だ。中国人観光客のキャンセルで、より打撃を受けるのは地方の観光業だろう。相互依存は、もはや生活の前提になっている。こうした生活者の視点に立って、憂き晴らしやドンチャン騒ぎではなく、困難な問題に向き合って「何が大切かを落着いて考える」フォロワーシップを育むこと。近隣諸国との関係も、こうしたフォロワー勝負のステータスに否応なく入ったといえる。

「依存と分配」から「選択と熟議」へ 転換のためのフォロワーシップを醸成 する場づくりとは

政権交代から三年あまり。迷走ときには逆走をともしないつつ、さまざまな混乱、試行錯誤のなかから民主主義の次のステータスが見えてきつつある。それは、利益を分配する民主主義から、リスクと負担を分かち合う民主主義へ転換するための実践的課題であり、別の表現をすれば「依存と分配」政治のリアルでポジティブなたたみ方と、「選択と熟議」の政治のリアルでポジティブな立ち上げ方ということだ。

では、リアルでもポジティブでもなかった。しかし同時に、依存と分配の政治から選択の政治への転換プロセスは、否応なく始まっている。これをチャラにしたり、後戻りさせるわけにはいかない。求められているのはフォロワーシップの転換だ。受益者市民―依存と分配のフォロワーシップのリアルでポジティブなたたみ方、主権者市民のフォロワーシップのリアルでポジティブな立ち上げ方―その実践的糸口、教訓をどこまで持って、次期総選挙を準備できるのか。受益者市民にとって、政治は「憂き晴らし」だ。右肩上がりのときなら「あれも、これも」が通用したし、参加とは「自分の要求を通す」ことでよかったが、それができなくなるとつたあが、それができなくなるとつたあが、逆に「何をあきらめるか」を合意したり、リスクと負担を分かち合うには、面倒な調整が不可避だ。いつまでもモタモタして決められない、としか見えない。「それならグレート・リセットだ」と、「パッサパッサ

「…『郵政選挙』の国家的集団ヒステリーのようなブームに踊らされて『刺激物』に飛びついてむなしさが残った経験と、今の政権を見て国民が学んだ『魅惑的な公約はあてにならない』という教訓をステップにして、何が大事なことを冷静に見る機会が、近いうちに訪れるのではないか」（松尾貴史 毎日7/28号）。

「郵政選挙」も〇九年選挙も、依存と分配政治のたたみ方とし

●第120回東京・戸田代表を囲む会【会員限定】

『『依存と分配』から『選択と熟議』へ
転換・移行の場づくり、関係の創り方とは～総会にむけて』
10月18日(木) 午後6時45分より
ゲストスピーカー 堀添健・前川崎市議、白川秀嗣・越谷市議、
米山真吾・葛飾区議、津曲俊明・船橋市議
「がんばろう、日本！」国民協議会 事務所(市ヶ谷)
会費 同人 1000円/購読会員 2000円

□第23回関西政経セミナー

10月20日(土) 午後6時から9時 コーピン京都202会議室
「マニフェスト政治文化、『次』のステージへの転換を」(仮題)
隠塚功・京都市議、上村崇・京都府議、中小路健吾・京都府議
諸富徹・京都大学教授、前田武志・参院議員、前国土大臣
参加費 1000円

◆第七回大会 第二回総会 11月3日(土・祝) 午前10時より午後6時

「がんばろう、日本！」国民協議会 事務所(市ヶ谷)
問題提起: 福嶋浩彦・元我孫子市長、諸富徹・京都大学教授ほか

■問い合わせ 03-5215-1330

脚していれば、「次の選挙」の
者市民のフォロワーシップに立
いるからにはかならない。受益
者市民のフォロワーシップに立
脚していれば、「次の選挙」の

それができない原因は、受益
者市民のフォロワーシップ
(「あとはお任せ」)に立脚して
いるからにはかならない。受益
者市民のフォロワーシップに立
脚していれば、「次の選挙」の

という方法で国民的議論が展開さ
れた。公共政策課題についてこ
のような方法が展開されたこと
自体、わが国でははじめてのこ
とだろう。
だからこそ、「次」が問われ
る。この国民的議論を通じて、
民意は「原発ゼロ」にあること
が明らかになった。しかし「原
発ゼロ」を柱に据えた「革新的
エネルギー・環境戦略」の閣議
決定が見送られたことによっ
て、今度は「骨抜きにされた」
といわれている。問題はここ
にある。
エネルギーにしろ、税と社会
保障にしろ、問題はきわめて多
面的で複雑だ。一度の国民的議
論でスッキリ結論がでるような
ものではない。だからこそまず
「ゼロ」という方向性を確認し、
そこから今度は「そのためには
どんなハードルがあるのか」
「どのような条件ならどうなるか」
という国民的議論を繰り返し、
それを積み重ねていく以外に合
意形成はできない。一度きりの
国民的議論で「結論」を出した
ら、「あとはお任せ」ではない
のだ。
政権交代に対する国民の期待
は、日本が直面する難題につい
て「どうなっており、どうなり
うるか」を、政治が国民と共有
することにあつたはずだ。民主
党がやるべきことは、「いろいろ
の問題もありますが、できたこ
ともこれだけあるんです」とい
う「言い訳」ではない。「いま
では進めました。そこから先に
行くには、こういうハードルが
あり、こういう課題を解決しな
ければなりません」と言って、
主権者市民のフォロワーシップ
を醸成することだ。

ためだけに右往左往したり、足
の引っ張り合いをしたりするこ
とになる。
同じことは自民党にもいえ
る。総裁選で、圧倒的に党員票
を獲得したのは石破氏である。
「自民党は変わらなければなら
ない」と一番鮮明に訴えたのが、
石破氏だ。「政権交代は国民が
民主党にだまされたからだ、と
いうだけではない」と。民主党
がいかにウソつきか、という主
張は構わないが、それだけでは
「国民がだまされた」というこ
とにかならない。これでは受
益者市民に支持を訴えることは
できても、主権者市民のフォロ
ワーシップを醸成することはで
きない。国会議員の投票が、党
員票とかけ離れていた本質的な
理由はここにあるといえるたろ
う。

受益者市民―依存と分配のフ
ォロワーシップのリアルでポジ
ティブなたたみ方、主権者市民
のフォロワーシップのリアルで
ポジティブな立ち上げ方―その
実践的糸口、教訓をどこまで集
積して、次期総選挙を準備でき
るか。すでに自治の現場では受
益者市民、負担者市民、経営者
市民という主体分岐がリアルに
なりつつある(三九九号など参
照)。ここから新たな政治回路
を創り出そう。
郵政選挙、そして政権交代選
挙、それらを教訓に三度目を茶
番にせず、「何が大切かを落ち
着いて考える」ための場づくり
を進めよう。憂さ晴らしのドン
チャン騒ぎは、早めに卒業しよ
う。

活者としての視点だろう。「税
と社会保障」にしろ、「エネル
ギー」にしろ、あるいは自治体
におけるゴミ収集の費用負担に
しろ、老朽インフラの更新問題
にしろ、「憂さ晴らし」では片
付けられない課題、生活の利害
にたつた議論から始めなければ
ならない課題は目白押しだ。
(その意味で、原発をスルーし
た自民党総裁選は、生活者とは
ほど遠いものだったといえるだ
ろう。)
あるいは、主権者市民のフォ
ロワーシップを醸成する問題提
起とはどのようなものか。それ
が醸成できない問題提起とはど
のようなものか。
福島原発事故を受け、政府は
今後のエネルギーのあり方につ
いて国民的議論を提起した。二
〇三〇年における原発依存度、
というところだけに焦点が当て
られた感があり、必ずしも論点
が出し尽くされたとは言いがた
いが、それでも委員会でのオー
プンな議論を経て選択肢を三つ
に絞り、意見聴取会、パブリッ
クコメント、討論型世論調査と

一面から続く
と既得権を切り捨てるヒーロ
ー」を探すべきになる。
しかしこれは一度目は悲劇、
二度目は喜劇でも、三度目にな
ると茶番だろう。こうした依存
と分配のフォロワーシップを、
どのように上手にたたくんでい
か。
「歴史を振り返る限り、革命
や維新でシステムが壊れて最も
損をするのは貧しい民衆。これ
は万古不易の真理です。しかし
それに民衆が気付かない、とい
うのもまた、普遍的な真理です。
よく『おきゅうを据える』とい
いますが、おきゅう一本ならど
もかく、システムが壊れたら全
身ヤケドです。なぜか有権者は
損する方に投票してしまふ」
「教育の根本は、自分にとって
何が得かを長期的視野でしか
り考えられる能力を育てること。
最も正しい投票姿勢は、正
しく理解された自己利益の追求
です」(鹿島茂 毎日6/18「橋
下現象を読む」上七)
「正しく理解された自己利益
の追求」の前提となるのは、生